



東洋英和女学院

史料室だより No.95

2020.11.6 発行
東洋英和女学院
史料室委員会



1970年に竣工した
野尻キャンプサイト
(長野県上水内郡信濃町
桐久保)



高等部 野尻キャンプ (1971年8月3日～9日) 向かって一番右端が長野彌先生

✿ 待望の野尻キャンプサイト

第二次世界大戦中にやむを得ず売却した東洋英和の野尻湖畔宮沢の野外教育施設でしたが、「いつの日か、何としても自分の在職中に野尻キャンプの再建設」を果たしたい…というのが、長野彌先生（元院長）の悲願でした。先生の奔走により東洋英和に独自のキャンプサイトが与えられたのは今から50年前の1970年。今号では、野尻での教育に「敬神奉仕」の修養を重ねてきた、東洋英和の特徴ある野外教育の歴史をたどっていきます。

✿ 目次

特集	野尻キャンプサイト50周年—野尻教育の意義—	石澤 友康	2
	年表にみる 野尻キャンプサイトと東洋英和		7
〈資料紹介〉37	「野尻」を知るための基本資料と行事解説		10
〈東洋英和の先生がた〉5	野尻を支えた先生がた		12
利用統計／史料室の活動より（2020年4月～2020年9月）			14





何が彼女たちをそうさせるのか

私が東洋英和女学院に入職した今から34年前の1986年は、野尻キャンプサイト開設16年目でした。その年の6月、校内で十数名の生徒たちが塊になって人目を憚らずに号泣している光景を目撃します。はたして彼女たちは野尻キャンプ参加の抽選に漏れた生徒たちでした。泣き崩れる少女たち。「これほどまでになってしまうキャンプというものは、いったい何なのだ…」。

夏休みに入ると同時に私を含めた新任教員たちは野尻の開寮に行かされました。未だ梅雨空の寒いキャンプサイト。開寮3泊4日は肉体労働の毎日です。前庭の草取り、ロープの端止め、湖底の木や石の除去、栈橋のブラシ掛け、浮台とオイルフェンス接続、ボート設置などなど。ひたすら続くワークに「これは教師の仕事なのか…」と同僚と愚痴り合いました。開寮後、生徒たちがやってきました。中2夏期学校、野尻キャンプ、訓練キャンプと続き、合計20日間に及ぶ野尻生活を終えた時、夏休みは半分以上終わっていました。

国際都市六本木にある女子伝統中高一貫校、東洋英和女学院。そこの夏の名物行事は、校舎から遠く離れた北信濃の湖で行われるワイルドで刺激に満ちたものでした。テキパキと動き元気潑刺の大学生の卒業生リーダー、先輩後輩同士もあだ名で呼び合う生徒たち、1時間もの遠泳を平気にこなす白帽（水泳のグレードが最上級の生徒）たち、ずっと働き続ける管理さん（施設全般を管理する卒業生や先生）、先生と卒業生が務めるキッチンさん…朝から晩まで

キャンプソングが歌われ、いつも笑い声が満ち、皿洗いや掃除すら楽しそうな7日間のキャンプ。最後の晩、クロージングファイヤーでその年に引退する卒業生リーダーが放った次の一言で、私はこのキャンプというものをやっと分かった気がしました。「私の1年間はすべてこのキャンプを中心に回っていました。誕生日よりもお正月よりも、この7日間は私の一番大事な時間なんです」

今年2020年、野尻キャンプサイト開設50周年を迎えました。新型コロナウイルス感染症により、この記念すべき年に野尻の行事はすべて中止です。夏休み直前のある日、高三生徒たちが「野尻っ子会」と称して後輩たちに呼びかけ、校内で野尻を思い、歌とゲームのひと時を持ちました。企画段階で高三たちは「今年野尻に行けないと後輩の気持ちが続かなくなると困るから」という思いを訴えてきました。



2020年、すべての野尻キャンプサイトでの行事が中止となる中、高三有志が開催した「野尻っ子会」

34年前も、今も、変わらずにある野尻への英和生の思い。いったい何が彼女たちをそうさせるのか。50年間、いや、歴史を辿ればもっと前から連綿と続く英和の野尻キャンプ。そこに継承されてきたものとはいったい何なのでしょう。

長野彌先生によってもたらされたもの

1970年。野尻キャンプサイトは長野彌（ながの・わたる）先生のご尽力により現在の寺ヶ崎に開設されました。詳しい経緯は参考文献の『野尻 野外教育施設の由来』に譲りますが、それはまさに長野先生の熱意が結実したものでした。実はこれに先立つこと35年前、1935年に東洋英和初のキャンプが野尻湖畔メソジスト教会少女ホームを借用して実施されています。翌年に野尻湖畔の宮沢（現サレジオ学院校外施設付近）に自前のキャンプ地を取得し、数年間はそこでキャンプを継続しました。しかし当時の戦時下での学校経営維持のために1945年に宮沢の施設と土地を売却します。長野先生はその年8月、終戦を告げられた時に「私はいつの日か、何としても自分の在職中に野尻キャンプの再建設と暖房施設の復旧、これは自分の責任として従前以上のものをつくり上げてこの罪亡ぼしをし、お詫びをしなければならぬと固く心に決意したのであります」と記しています。戦争のため金属供出の要請に応じて校舎の暖房設備を撤去したこととともに野尻でのキャンプ施設再取得を長野先生は固く決意していました。長野先生がそれほどまでに執着した野尻キャンプ施設とそこでの教育。それらを私たちはどのように捉えればいいのでしょうか。



野尻滞在中の長野彌先生。先生は野尻学荘では「オポボン」「オボン」のキャンプネームで親しまれた。

それには「長野彌」という人物とキャンプ教育との関係を紐解く必要があります。長野先生は1904年山形県生まれ。メソジスト派牧師のご尊父はこの年に逝去されます。22歳で受洗。28歳で本郷中央教会の先輩小林彌太郎氏の媒酌で寿美夫人と結婚。1933年に29歳で東洋英和に数学教諭として着任します。同年に小林氏の紹介で第2回野尻学荘にリーダーとして初参加しています（『オポボン100 長野彌先生誕生百年記念想い出帳』より）。小林彌太郎とは、日本のキャンプがYMCAによって始められた創成期に、私財を投じて山中湖畔平野と野尻湖畔桐久保にキャンプ場を開設した人物です。1932年に小林氏が荘長となり第1回野尻学荘キャンプが開催されています。日本での最初の本格的な少年長期キャンプの始まりです。その小林氏とのキリスト教の繋がりにより、長野先生は野尻学荘に招かれ、やがてキャンプ教育にのめり込んでいきます。

そんな若き長野先生が英和の教師として勤務した時の校長がハミルトン先生でした。ハミルトン先生は、普段無遅刻無欠席の長野先生が夏休みになるとプツリと学校に顔を出さなくなることに疑問を持ちます。その後、風の便りで野尻湖畔のYMCAにいたことが分かり、実際に訪ねていきます。先生はそこでのキャンプ教育の実態を見て、非常に感じる処があり、東洋英和でもキャンプ教育を行う決断をします。それが1935年です。そして翌年には宮沢の地を獲得。長野先生にキャンプ場の設計企画をすべて一任します。ここでの施設や備品などの多くはYMCAから借りていました。その後、英和キャンプは宮沢の地を手放し、戦時下での中断を経て、戦後1950年～69年はYMCA野尻学荘を借用して再開されます。

したがって、英和のキャンプ教育は長野先生によってもたらされたYMCA野尻学荘のキャンププログラムが基礎になっています。ではそのYMCAのキャンプ教育の理念はどのようなものでしょう。『野尻学荘80回記念誌』によると「極めて教育性を強調し、進歩主義教育、グループワーク、個性の尊重という一連の特徴を持っていた。具体的なキャンプの見本としてT・スタントン、H・S・ディモックが指導していたカナダのキャンプ・アーメック（Camp Ahmek）があり、教育思想的にはデューイの実験学校があったのである。人の“成長”はそれ自体価値がありまた目的であるという考え方にに基づき、個人の総合的な成長を促すため、知、徳、体、社会性という局面での個人のバランスのとれた発達を目指した」とあります。さらに「野尻学荘の最も



1970年に完成したキャンプサイトには宿舎5戸、集会ホール兼食堂、艇庫が設けられ、当初はボート1隻、カッターボート3隻が備えられていた。

根源的で重要な部分の一つはキリスト教教育であった」と続きます。つまりは東洋英和が掲げている教育理念とも合致しているのです。この理念を持った野尻学荘でのキャンプ教育が、英和キャンプ教育の源流となっていきます。そしてそれは「長野彌」という教育者の原点でもあったのです。

英和キャンプ教育の現実

このように英和のキャンプはYMCA借用時代を経て、寺ヶ崎に自前施設を獲得し現在のキャンプへとつながっていきます。YMCA時代には野外教育に精通したYMCAリーダーの手を借りてのキャンプでしたが、自前施設となるとそうはいきません。英和の教師たちは特別にキャンプ教育を受けてきたわけではありません。

1971年に校務組織に「キャンプ研究委員会」が立ち上がり、当時の中高部長（71年は長野先生、72年は石井次郎先生）にキャンプ教育のあり方についての答申をしています。長野先生は71年度末に退任されますので、悲願のキャンプサイト獲得後には後進にキャンプ教育を託した形です。バトンを渡された者たちが、キャンプ教育はどのようにあるべきかを模索する姿がそこにはあります。答申の中でキャンプ教育の目標は次のように記されました。「自然的、社会的、教育的に選ばれ配慮されたよい環境における真の共同生活の体験を通し、若い魂に自己を知るとともに友を知ること、隣人を尊重しつつ共に生きるよろこびや人間の思いをこえた造り主の臨在を知らせる」。これは学院標語「敬神奉仕」をそのまま言い換えたような目標であり、現在も実践されているものです。先の『野尻 野外教育施設の由来』の中に石井先生の言葉があります。「東洋英和は、人生の全行程を、『敬神奉仕』のプリンシ

プルにのっとなって走りぬくための人間教育を目的として存立する学園です。そのために校外の施設で行なう教師と生徒の共同生活を極めて重要なものとして正課の中に組入れて来ました」。東洋英和は学校です。したがって学校で行われるキャンプ教育は、それだけが孤立したものであってはならず、学校が持っているカリキュラムの一部として成立していなければいけません。その意味で、答申にある「人間の思いをこえた造り主の臨在を知らせる」という点で、英和教育の最終目標に限りなく近づける場が野尻であるとされています。また『東洋英和女学院百年史』ではこのように表現されています。「東洋英和にとって、校外活動の場としての野尻は、単なる校外施設ではなく、英和教育の一原点ともいえるべき重要な教育の場である」。野尻の位置付けが定着していきます。

答申の中にはさらにリーダー養成が明記されています。第1回リーダーズキャンプ（教師キャンプ）が1972年に開催されています。（第2回は1989年、その後約5年ごとに開催）また卒業生リーダーの登用がここで決定されていて、手作りの英和キャンプ教育の大きな特徴が示されました。

このように英和キャンプ教育は徐々に独自の進化を遂げながら継続されていきます。実際に日本の中学高校レベルでこれだけの施設とキャンプ教育を現在も維持している学校は極めて珍しいといえるでしょう。しかし一方で、東洋英和も私立学校で経営と教育は背中合わせです。あれだけの備品と設備を持ちメンテナンスにも費用が掛かり、しかも1年間で夏の期間しか使用しない施設です。経営の観点だけで見れば、バツサリと処分されてもおかしくありません。実際に2000年前後にかけて、施設の老朽化や生徒を取りまく社会環境の変化で、キャンプ参加者の募集に苦心した時期や、管理運営面の問題でこのままキャンプ場を維持できるかという危機的状態に陥ったこともありました。また担い手である教師たちも学校での多様化する業務を抱えています。野尻教育やリーダー養成は十分に理解できるが、実際にどこまで時間を割けるのかという課題もあります。このような苦難の歴史や現実の課題を背負いながらも、今日まで英和キャンプ教育が絶えることなく継承されてきた理由はどこにあるのでしょうか。

野尻の教育効果

具体的なキャンププログラムの教育効果を考えてみます。一つの例として「カッター」を挙げます。カッターは8人漕ぎの救命ボートです。普通の生活

を送る人は、乗船した大型客船が沈没でもしない限りそれを漕ぐ機会はずりありません。野尻では中2夏期学校で全員が経験し、キャンプではキャビンデーの大事なアイテムです。たかが中型ボートを漕ぐだけですが、ここには現代教育的にみると重要な要素が盛りだくさんです。それは、一人ひとりの漕ぎ手の個人のスキル、全員でオールを揃える協働のスキル、ラダーを持つ人の判断力とリーダーシップ、リーダーを支えるフォロワーシップ、メンバー同士の状況に応じた助け合い。どれが欠けてもカッターはうまく目的地まで進めません。究極の総合学習です。他にも、遠泳での達成感、野外炊飯での協調性、スタンプ（キャンプファイヤーなどでグループごとに披露する寸劇などの出し物）での発想力など、数々のキャンププログラムには校舎の中では培いにくい教育効果が期待できます。

またキャンプは「何が起こるか分からない」ということも隠れた教育要素なのです。なにしろ自然が相手なので、突然の雷雨に水泳が中止になったり、キャンプファイヤーが室内になったりもします。水道が故障しキャビンのトイレ用に湖水をバケツで汲み上げたこともあります。そのような事態に出会った時、「じゃあ私たちができることは何か」「今起こっていることにどう対処するか」、創造力、対応力、柔軟性などが問われます。自分たちが目指していたものが突然取り上げられることもあります。最後のクライマックスの選択プログラムまとめが、雷で急遽中止されることも経験しました。誰のせいでもない事態をどのように受け止め、そこにどのように意味を見出すか。まさに人生と同じではないでしょうか。

そして最も重要なのは生活そのものです。生活即教育。公共の場の掃除当番、自分の場所の整理整頓、



カッターボートを漕ぐ生徒たち。それぞれの役割を担って初めてボートは進む。体力・知力・チームワークを駆使しての究極の総合学習である。



現在の野尻キャンプサイト。さまざまな時代の試練を経て、東洋英和の野外教育が継承されてきた。

食事当番、食後の後片付け、皿洗い。自分たちの生活を自分たちで担っていく体験です。共同体の中での自分の小さな働きが、共同体全体の大きな受益となる感覚が、理屈抜きで自然と身に付くのが野尻です。そこで隣人と共に生きることを実体験するので。生徒が「野尻マジック」（野尻から帰るとなぜか積極性が増し、家の手伝いや勉強などをやるようになること）にかかるのも、実によく分かる現象です。以上のものを実現させているのは野尻の「自然的、社会的、教育的に選ばれ配慮されたよい環境」です。生徒の学びの場にはそのような適切な閉ざされた空間が必要です。そこでは、不必要で雑多な情報を絶ち本当に望ましい教育材料の提供とのびのびと取り組むことが可能な安心できる空気がつくられます。現代の高度化した情報化社会に身を置く生徒たちにとって、その空間の確保は困難を極めます。スマートフォンを一時も手放せないのが今の生徒たちの現実です。しかし、野尻ではそこから解放されます。そこでの数日間、生徒は生き生きとしてきます。まるで束縛から解放され、本来のあるべき子どもの姿をさらけ出すかのようです。ましてや大自然に抱かれたあの環境です。美しい湖水、緑なす木立、茜色に輝く夕焼け、満天の星空、蝉の声や風の音。本来人間が渴望する要素を備え持つ空間が野尻にはあるのです。そこで素直な自分と出会い、自分の存在を振り返る時を持つことができます。

継承されるに値するもの

ある年の野尻キャンプに中学受験雑誌の編集部の方々が是非英和の名物行事を取材したいと3日間かけて訪れました。キャビンデー、スタンプ、選プロまとめ、クロージングファイヤーなどすべてを取材した後の編集長の一言。「これは本物の青春ですね」そうなのです。野尻には「本物」があるのです。

正々堂々とした青春があるのです。若い魂が、なぜか分からないけれどそうしないわけにはいかない衝動に突き動かされ、自分の持てるエネルギーを存分に発散できる時を過ごすことができるのです。プログラムを通して自分の成長を実感できる体験、不便でも友と過ごす共同生活で共に生きることを実感できる体験があるのです。生きる手応えがあるのです。そして、生きるとはどのようなことか、共同体の中での自分はどのようにあるべきかに導かれ、命や自然を与えてくれた造り主の存在を知り感謝できるようになるのです。それらを野尻は、キャンプは、教えてくれるのです。卒業生たちはこの野尻の体験を後輩に伝えたいと思い、後輩たちは先輩たちがよしとしてきた体験を受け継ぎたいと思う。この相関関係は、ここでの体験が本物だから起こるのです。

教師にとっても、野尻での生徒の変容を目の当たりにする経験は、教育に携わる者としての喜びを実感できるものです。教育の成果をどのように測るかは、教師の永遠のテーマです。判りやすく簡単なのは、試験の点数や学校の進学実績などの数字です。もちろん学校なので、このような目に見える認知能力の向上も大事です。しかしもっと大事なものは目に見えない非認知能力の獲得です。信仰、勤労精神、責任と奉仕、創意工夫、忍耐力、友情などなど。これらこそが人生を歩む上ではもっと大事なもので、一度身につければ決して失われないタラント (talent) です。しかしそれは数字で測れない。ではどうするか。生徒の変容を見るしかありません。野尻で生活するうちに変わっていく生徒の輝く笑顔、生き生きとした表情、進んで働く姿。それらに私たち教師は教育の手応えを感じるのです。野尻で教師は、教育の本質を目の当たりにします。忙しい英和の教師にとって野尻の準備は実に大変です。生徒もですが、教師も全員が全員野尻を好きなわけではありません。しかしそのような中でも、英和キャンプ教育の持つ意義と引き継がれてきた思いには、継承

されるに値するものを感じるのです。『オポン100』の遺稿の中で、長野先生はご自身を教職に対し無学のまま教師になったと述べ、次のように続けています。「そのようなわけで教育心理学も修めず、教育実習も経験せず、教育の何たるかも考えることなしに教師の生活に入ったわけでありました。(中略)戦後の27年間も学校長として1つの学校の教育に携り責任を果すことのできたのは野尻学荘にての実地体験のおかげと感謝しております。換言すれば私の教育原理、教育心理学、校長学はすべて野尻学荘を通して体験的に深く深く与えられたものということができます」。

長きにわたって継承されてきた野尻での英和キャンプ教育ですが、私は現在でもそれは未完成だと思っています。未完成であるが故にさらにより良きものを目指して、50年いやそれ以上にわたって、その時々教師や生徒や卒業生や保護者が、課題や問題を抱えながら悩みながら、変えるべきところは変えながらずっと守り繋いできたのでしょ。それほど野尻には継承されるに値するものが輝いているのです。長野先生によって撒かれた一粒の種は今や大きく実を結び、これからも100年200年と成長し続けて欲しいと祈ります。

【参考文献】

- 『野尻 野外教育施設の由来』 敬和会 1975年
- 『東洋英和女学院百年史』 東洋英和女学院 1984年
- 『野尻キャンプサイトの20年』 東洋英和女学院 中学部・高等部キャンプ委員会 1991年
- 『オポン100 長野彌生先生誕生百年記念思い出帳』 野尻学荘クラブ 2004年
- 『野尻学荘80回記念誌～山々高く～』 公益財団法人東京YMCA 2016年
- 『ハーバードの日本人論』 佐藤智恵 中央公論新社 2019年
- 『サル化する世界』 内田樹 文藝春秋 2020年

予告 『野尻キャンプサイト50周年記念誌』を来年2021年夏に刊行予定！

野尻キャンプサイトの歴史については、今までに『野尻 野外教育施設の由来』(1975年)、『野尻キャンプサイトの20年』(1991年)という記念誌が刊行されてきました。

1990年から2020年の30年間にも教育プログラムの変更、キャンプサイト運営の危機などさまざまな出来事がありました。現在、中高部の記念誌編集会議では、野尻を支えてきた方々の声を集めながら記念誌の編集を進めています。ご期待ください！

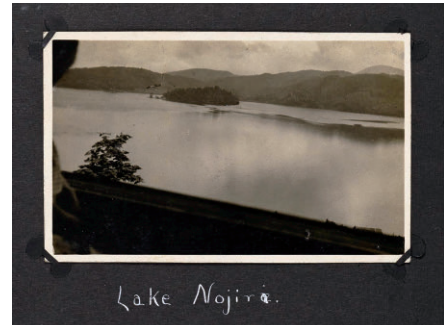


年表にみる 野尻キャンプサイトと東洋英和

英和キャンプ開始以前 1935年以前

日本では大正時代の半ばにYMCAが青少年教育事業に着手、YWCAも女学生キャンプを開催。軽井沢の俗化を嫌った外国人たちが1920年代から長野県野尻湖に別荘を建て始め、その野尻湖畔に東京YMCAの小林彌太郎がキャンプ場を開設。小林彌太郎と同じ本郷中央教会の教会員だった長野彌先生（のちの本学院院長）が、東京YMCAの野尻学荘でキャンプリーダーとして活動していたことが、英和が野尻でキャンプ教育を行うことの基盤になっていった。

- 1931 (S6) 東京YWCAが野尻湖国際村で野尻キャンプを始める
- 1932 (S7) 小林彌太郎が東京YMCA野尻学荘建設。5週間の少年長期キャンプを始める
- 1933 (S8) **長野彌先生**が東洋英和に就任。東京YMCA野尻学荘の指導者も始める
- 1934 (S9) **ハミルトン校長**が東京YMCA野尻学荘視察か？
東洋英和女学校創立50周年



第1期 宮沢時代 1935～1945年

東京YMCAの野尻学荘を見学したハミルトン校長は野尻湖での英和のキャンプを実施。1938年には野尻湖畔宮沢の地（現在のサレジオ学院校外施設のあたり）に独自の施設も完成し、小学科・高等女学科・師範科でキャンプを行う。戦局が厳しくなり、夏期キャンプは次第に鍛錬・集団行動・勤労教育の方向に転換していった。野尻での夏期行事は1942年を最後に中断したと思われる。1945年には学校の財政危機のため宮沢の土地・施設を売却した。

- 1935 (S10) **野尻湖畔の日本メソジスト教会少女ホームにて高等女学科が初めての夏期キャンプ**
- 1936 (S11) 野尻湖畔の宮沢にキャンプ用地取得（約1,800坪）
- 1937 (S12) 東京YMCA野尻学荘にて高等女学科がキャンプ
- 1938 (S13) ミス・ハミルトンが校長を退任。

野尻湖畔宮沢に英和独自の野外教育施設を新築

小学科 夏期学校

場所：野尻湖畔宮沢

高等女学科 キャンプ第1班（3年生以上）

場所：東京YMCA野尻学荘

高等女学科 キャンプ第2班（1、2年生）

場所：野尻湖畔宮沢

師範科も1週間ほど野尻湖畔でキャンプを行っている

- 1939 (S14) 高等女学科、小学科、卒業生希望者、師範科で野尻湖畔での夏期行事を予定していたが学内で集団赤痢が発生し、キャンプを自粛。また「夏季心身鍛錬二関スル通牒」により夏期休暇認識は正の必要が迫られる
- 1940 (S15) 英和は野尻と静岡県の宇佐美で夏期行事を行っている
小学科 夏期学校 場所：野尻湖畔宮沢
高等女学科 夏期学校 場所：野尻湖畔宮沢
師範科も野尻湖畔でキャンプを行っている
- 1941 (S16) 野尻と宇佐美で夏期キャンプが計画されていたが、「a 管外に亘る教職員及生徒児童の団体旅



行は特に指示があるまで凡て当分の間之を中止又は延期すること」という依命通牒により野尻、宇佐美のキャンプは中止、北海道への修学旅行、御殿場のYWCAキャンプ参加も中止となる

- 1942 (S17) 野尻にて初等科鍛錬夏期学校、高等女学科の夏期学校が行われる
- 1943 (S18) 時節柄キャンプを中止
- 1945 (S20) **学校の財政危機のため野尻湖畔宮沢のキャンプ用地・施設を手放す**
- 1947 (S22) 戦後、**長野先生**が院長就任

第2期 東京YMCA野尻学荘時代 1950～1969年

戦中・戦後しばらく中断の後、野尻キャンプは東京YMCA野尻学荘を借用して再開された。当初はYMCA式キャンプで行ったが、次第に英和の教師による企画運営がなされ、一部中高部以外の職員や卒業生の手助けも借りた。キャンプ規模は徐々に拡大した。一方、戦時下到手放した施設に代わる新しい独自のキャンプ施設の建設は長野先生の悲願であり、1950年代後半より徐々に土地を購入し設備・備品を整え、英和キャンプサイト建設の準備がなされた。

- 1950 (S25) **戦後初めての英和の野尻キャンプが東京YMCA野尻学荘にて行われる。**参加者は先生、生徒（高等部1、2、3年有志）、卒業生、YMCA指導員の総勢56名
- 1952 (S27) 東京YMCA野尻学荘でキャンプリーターであった**富岡正男先生**が、英和の中高部の音楽教諭に就任。英和のキャンプでも活躍する。この年から中学部キャンプ、高等部キャンプがそれぞれ行われる
- 1955 (S30) キャンプ常置委員会設置
- 1956 (S31) **野尻湖畔の桐久保にキャンプ用地購入開始（～1967年）**
- 1959 (S34) キャンプ主題聖句が「光の子らしく歩きなさい」に決定（以降変更なし）
- 1961 (S36) YMCA隣接地が売りに出され、環境保全のため、長野先生を含む学荘関係者による寺ヶ崎開発合資会社（寺ヶ崎クラブ）が共同購入。そこに共同別荘として旧寺ヶ崎ロッジ（ハウス）が建てられる
- 1962 (S37) 「近い将来には学院キャンプサイトの基礎となる」と目された旧英和ハウスが寺ヶ崎に建てられる
- 1966 (S41) 野尻キャンプは松代群発地震のため中止
- 1967 (S42) 東洋英和が寺ヶ崎クラブより寺ヶ崎ハウスとキャンプ用地購入（約4,000坪）
- 1969 (S44) 校外行事研究委員会より生活訓練を中心に中2全員対象の夏期学校が提案される



第3期 キャンプサイト開設以降 1970年～現在

1970年に念願の自前のキャンプサイトを建設。英和キャンプ教育の在り方や卒業生リーダー養成などが精力的に検討され、プログラムも多様化する。1980年代に現在のキャンプスタイルが定着し活況にみち、参加者も増え優れたリーダーも育成された。1990年代より参加者の減少が目立ちはじめ、施設の老朽化と管理運営など経営的にも問題が浮上した。このころから卒業生による「野尻基金支援の会」が立ち上がり募金やTシャツ等の販売で資金援助、施設修理などのボランティア活動が行われる。2005年に池田守男先生が理事長に就任し、野尻教育の意義が再認識され、野尻キャンプサイトは存続の危機を越え改築され、現在に至っている。

- 1970 (S45) **キャンプサイト落成（7月）。英和独自のキャンプサイトでのキャンプを実施**

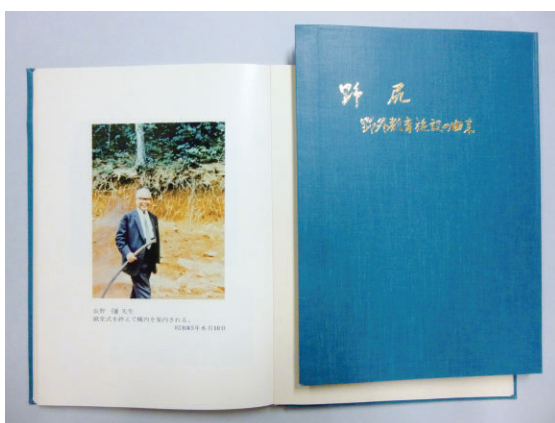
- 1971 (S46) **第1回 中2夏期学校(学年全員参加)の実施**
- 1972 (S47) **第1回リーダーズキャンプ(教師キャンプ)実施。**
長野先生退任、**石井次郎先生**が院長就任
- 1975 (S50) **第1回訓練キャンプ(リーダー養成キャンプ)実施**
- 1983 (S58) 修養会を野尻キャンプサイトで実施(～1998年まで)
- 1984 (S59) 東洋英和女学院創立100周年
- 1988 (S63) 野尻キャンプで「静のプログラム」(メディテーションなど)が研究される
- 1989 (H1) 第2回リーダーズキャンプ(教師キャンプ)実施。以後、約5年ごとに実施
- 1991 (H3) 校外教育施設委員会に野尻キャンプサイト分科会と軽井沢追分寮分科会を設置
- 1992 (H4) 中2 夏期学校、4泊5日から3泊4日に短縮
- 1995 (H7) 第Ⅰ期工事(新キャビン5棟改築)完了
- 1997 (H9) **第1回オープニングキャンプ開催(父親有志17名参加)。**
 野尻キャンプで募集定員に満たない年が続ぎ参加を促すためL(ロング)キャンプ、S(ショート)キャンプ実施
- 1998 (H10) 野尻キャンプ、6泊7日から5泊6日に短縮
- 1999 (H11) 東京YMCAに管理業務を試験的に委託。東京YMCAと土地賃貸契約を結び、YMCAが地上の建物を改築する時点で20年間の定期借地権を設定する、中高部の夏期行事は今後とも優先的に使用できるという契約の締結を理事会・評議員会で決定
- 2001 (H13) 東京YMCAより借地料および建物の改築費捻出が困難との申し出があり契約は解消となる
- 2003 (H15) 野尻キャンプサイト存続のため卒業生有志による**野尻基金支援の会**が正式に発足
- 2004 (H16) 東洋英和女学院創立120周年。那須山荘購入
- 2005 (H17) **池田守男先生**が理事長・院長事務取扱に就任。**野尻キャンプサイト改築が進展**
- 2007 (H19) 野尻基金支援の会企画の「阿川佐和子と野尻を語る会」開催
 第Ⅱ期工事(新英和ハウス・新寺ヶ崎ハウス・浴室棟)完了
- 2008 (H20) 第Ⅲ期工事(新メインホール:長野彌記念ホール)完了。
竣工感謝キャンプ開催
- 2009 (H21) 新艇庫竣工。オープニングキャンプにて竣工感謝礼拝を行う
- 2020 (R2) **野尻キャンプサイト50周年**



〈資料紹介〉37 「野尻」を知るための基本資料と行事解説

—ただの夏期行事にとどまらない、歴史の蓄積と現代に続く実践—

東洋英和では、夏になると野尻キャンプサイトに行きたくなり、居ても立ってもいられなくなる「野尻っ子」たちが、在校生、卒業生、保護者、先生がたの中に何人もいらっしゃいます。しかし、野尻に何度でも通う結束の固い「野尻っ子」以外の人々にとっては、さまざまな野尻の行事は全く区別が付きません…。そこで、今回の資料紹介では、野尻での野外教育をよりよく知るための**基本資料**を紹介し、**野尻の諸行事**について解説いたします。学院関係者には夏の期間にキャンプサイトが開放されておりますので、是非、野尻をご訪問ください。



「由来」と「歴史」と「キャンプの心」の記録

『野尻 野外教育施設の由来』(1975年)

「野尻の野外教育施設については私には特別な関心と執着のようなものがありますので…」と長野彌先生が語っているように、戦前の宮沢時代からキャンプサイト再建まで、長野先生を中心にキャンプを支えてきた方々の足跡と熱い思いが記録されている。

この本は、中高部母の会OG有志からなる「敬和会」によって学院創立90周年を記念して発行された。野尻での野外教育が、いかに建学の精神「敬神奉仕」に通底しているのかを納得させられる記念誌である。



中2夏期学校しおり。まだ見ぬ野尻を思い描いて中2が作成

行事解説 泳げなくても全員参加【中2夏期学校】

1971年より開始。中学部2年生が全員参加する学校行事として実施。約200名の生徒が前期・後期に分かれて参加し、水上プログラムを中心に自然観察ほかの総合学習を含めた共同生活を行う。ほとんど泳げない「赤帽」にはじまり「黄帽」「青帽」「白帽」に分かれ、最後に全員、それぞれのレベルで長距離を泳ぐ。東京六本木の女子校でありながら、野尻で展開されるワイルドな英和の野外教育に驚く生徒、新任教員も少なくないが、ここから野尻に魅了される生徒も多い。

行事解説 学年を越えて、さらには卒業生も集う

【野尻キャンプ】

1935年の日本メソジスト教会少女ホームにおけるキャンプが端緒となる、野尻湖畔における夏期野外教育活動の一つ。現在は5泊6日の期間、学院の所有する校外施設「野尻キャンプサイト」にて、中学部3年生～高等部三年生の希望者(最大90名)が参加して行われる。野尻キャンプを経験した卒業生がキャンプリーダーとして指導に加わり、キャビン(宿泊棟)にて生徒たちと共に寝起きをして絆を深めるのが特徴。

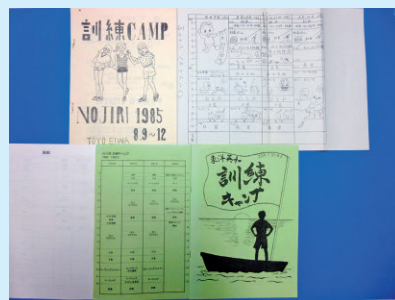


東京YMCA野尻学荘時代の野尻キャンプしおりと富岡正男先生が作词・作曲・編曲したトミソングを載せたキャンプソング集

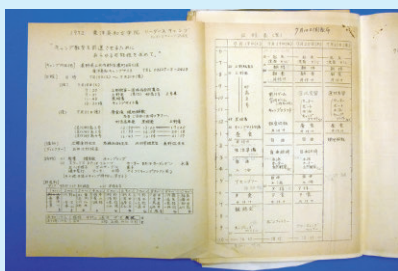
行事解説 もっとキャンプを極めたい生徒たちへ

【訓練キャンプ】

1975年に始まった、プログラムの基本的技能をさらに磨き、キャンプについての知識を深め、実践に役立てることを目標とするキャンプ。3泊4日、野尻キャンプの前後に続けて行われる。夏期学校、野尻キャンプでは指導者が行う準備から片付けまで参加者たちが自ら行う。このキャンプでの生徒時代の経験を活かし、卒業後に「リーダー」や「管理」（施設全般の管理を専ら行う担当者）として活躍する卒業生も多い。



船上で仁王立ちする少女の姿も勇ましい訓練キャンプしおり（下）
プログラムは極めてハードである（上）



1972年 第一回目のリーダースキャンプ資料。モットーは「キャンプ教育を前進させるためにあらゆる可能性を求めて」

行事解説 先生たちも最初はキャンプ初心者

【リーダースキャンプ】

東洋英和女学院中学部・高等部の教員で行われるキャンプ。専門講師を招き、1972年の第1回以降、約5年に1回開催。教員は原則全員参加。2015年の第7回では、「東洋英和の教育における野尻の位置づけ」「安全に関する研修」「キャンプにおける生徒への技術指導力向上のため、教師自身のスキルアップを図る」の3点に重点を置き実施された。教員のための大切な研修の場となっている。



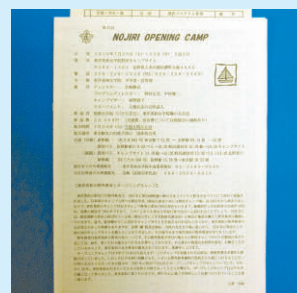
野尻を愛する教員たちがまとめた記念誌
中学部・高等部『野尻キャンプサイトの20年』（1991年）

1970年のキャンプサイト開設から20年間の記録を、当時の中高部キャンプ委員会が整理・編纂した記念誌。キャンプ運営の組織図解説やプログラムの変遷一覧などデータも豊富、野尻野外教育で重要な役割を果たした教員や卒業生の寄稿、野尻っ子座談会など読みどころ満載である。巻末の河野和雄先生（元中高部音楽教諭）による年表「野尻キャンプのあゆみ」は、パイプオルガンもヨットも自分で組み立ててしまう、河野先生ならではの緻密で詳細を極めた心躍る年表となっている。

行事解説 お父様たちの熱情がキャンプを下支え

【オープニングキャンプ】

中高部の在校生・卒業生の父親の有志、新任教員を含む教職員などによる、開寮（前年秋から使用していなかったキャンプサイトを開けて、キャンプができるよう準備をする作業）を行うキャンプ。第1回は1997年に父親17名の参加により開催された。以降、多い年では90名近い父親が参加。ワーク（キャンプサイトの準備・整備）だけでなく水上・陸上のプログラムも用意され、生徒たちが参加する行事を父親たちも体験できる機会にもなっている。



2019年 第23回目を迎えたオープニングキャンプの案内。学院からお父様たちへのキャンプサイト維持に対する感謝が述べられている

〈東洋英和の先生がた〉5 野尻を支えた先生がた

野尻キャンプを切り開いた先生がた

東洋英和女学院野尻キャンプサイト50周年にあたり、前史である1935年の初キャンプ以降、宮沢、東京YMCA野尻学荘でのキャンプを経て脈々と受け継がれて来た野尻野外教育は、影日向になり導いてくださった、野尻を愛する先生がたによって支えられてきた。

まず筆頭に元院長・理事長 **長野彌先生**が挙げられる。現キャンプサイトの中核であるメインホール



長野彌先生

昭和四十七年

長野彌

患難忍耐
鍊達希望

長野彌先生のお祝いの言葉
(1972年短期大学卒業アルバムより)

「先生、木が育つのは早いですね」と言うと、先生は即座にしかもぶっきらぼうに答えられた—「だから早く植えなければいけないのです」。これが長野先生の教育理念であった（「敬和会」No.58 長野彌先生ご召天10周年記念号／橋詰正治先生（元中高部教諭）「長野彌先生、思い出すこと」）。この言葉が示す通り、先生は自ら道を切り開きながら行動なさる方であった。長野先生のご功績は今号の特集（石澤友康中学部長寄稿）にもまとめて記されている。

次に、長野先生と同じく東京YMCA野尻学荘に指導者として加わり、のちに東洋英和の同僚となり共に英和の野尻キャンプを盛り立てていったのが、**富岡正男先生**（通称トミさん、トミ氏）である。音楽のリーダーであった先生は数々のキャンプソングを作詞・作曲・編曲し、それらは今も「トミソング」と呼ばれ歌い継がれている。中高部音楽科教諭に就任したのは1952年であるが、それ以前の戦後第1回英和野尻キャンプ（1950年）から指導者に名を連ねており、「トミさん」のユニークな歌唱指導に



富岡正男先生
(1965年高等部卒業アルバムより)

よって、参加者たちはキャンプの一日が歌に始まり歌に終わる楽しさを体で覚えていたのであった。1972年に英和を退職後も、野尻学荘のリーダーとしてYMCAを訪れる合間に英和キャンプサイトを訪問して下さり、2008年に98歳で召天されるまで、「キャンプサイトのあるところ」（2005年）など新しい歌の創作を続けられた。

キャンプ草創期を支えた先生がた

鵜沼幸（うぬま・さき）先生は1924～1965年の長きにわたり在職され、戦前戦後の野尻キャンプに

深く関わられた。戦前は長野先生がリーダーを務めていたYMCA野尻学荘に誘われ、男子ばかりの5週間のキャンプ生活に参加、1938年の第7回から1942年の第10回の指導者として名前が記録されている（『野尻学荘60回記念誌 光に歩めよ』）。このご経験が元となり、英和の野尻キャンプでは副ディレクターを何度も務めるなど、野尻キャンプのよき指導者となられた。



鵜沼幸先生
(1965年高等部卒業アルバムより)

先生は『野尻 野外教育施設の由来』（以後『由来』）を始めとする多くの学内刊行物に、国語科教諭ならではの筆致で野尻の魅力を伝え残している。戦前のキャンプで眼の具合が悪くなってしまった生徒を親元に帰すことになり、夜が明けかけた野尻湖を卒業生と2人ボートで漕ぎ出し、対岸の村まで懸命に生徒を送ったこと（『由来』「野尻点描」より）、毎夏野尻で被っていた古めかしい白いピケ帽子が亡くなられたご長女の遺品で、ある夏中学部生にボートの練習をさせていた時にその帽子が飛ばされ、あっという間に湖深く沈んでしまった時の心境（『楓』創立七十周年記念号「帽子」より）などから、野尻での生徒との関わりや、先生と野尻の結びつきを伺い知ることができる。「史料室だより」No.85「鵜沼さき先生の思い出」（黒川信也元高等部長執筆）も参照されたい。

鵜沼先生の『由来』「宮沢＝桐久保」の中で、「山路を飛ぶようにゆく水木先生」と称されているのが、



水木百代先生
(1941年高等女学科
卒業アルバムより)

体育を教えた**水木百代（みずき・ももよ）**先生である。水木先生は1931年の就任以来、千葉県西岬海岸での10日間の海水浴（1933年）や故郷青森県の大鱒でのスキー教室（1934年）を実現するなど、当時の校長ミス・ハミルトンに、体育の充実と集団生活の必要性を説き、夏休みと冬休みを利用しての団体訓練、キャンプ、海水浴などを提案

した。『東洋英和女学校五十年史』の「校友会史」の章では「体育部」に先生の記述がある。「ややもすれば静的方面のみに力を注がれて来た宗教学校の子供達の中には、屢々惜しい四年、五年で斃れる人々のあるのを知りまして、私は本当に悲しい事だと思つて居りました。そして寧ろ動静の渾一された下に教育されてこそ、意志のガツチリした人間が出来上り、これこそ宗教教育の真の目的を達し得るのではないかと唱え、「又許されるなら、今後修養部と協力して、夏のキャンプに、冬のスキーに、良い仕事をしてゆき度いものと願つて居ります」と語っている。

水木先生にとって初めての野尻湖畔でのキャンプの経験は、海水浴と同じ夏、当時教頭だった吉本てう先生と共に参加した上田市の日曜学校の生徒を中心として毎年開催されているキャンプであったそうだが（水木モモヨ著『春まだ浅き頃に—ハレー彗星と再びまみえて—』より）。『楓』第6号「1935年夏期キャンプについて」（丸山民子先生記／1936年3月発行）には、日本メソジスト教会少女ホームでの第1回キャンプの指導者として水木先生の名前があり、草創期からキャンプ指導をされていたことが分かる。その後の宮沢でのキャンプでは「一日中キュロットスカートをはいて動き回り働き続けましたが、（中略）疲れも感ぜずにごんばりました」（同『春まだ浅き頃に』）と奮闘ぶりが伺える。水木先生が宗教教育と体育の結び付き場として重視されていたキャンプは、戦況の悪化で「鍛錬」の場である必要に迫られ、先生が1945年に退職されるまでに、開催自体も難しくなっていた。

キャンプサイトの50年に欠かせない先生がた

岡本幸江先生（国語科）は大学卒業後すぐに宮沢時代の小学科別科（帰国生のクラス）のキャンプの引率をされ、その後現地のキャンプサイトに至るまで様々な責任者として野尻キャンプに関わられた。高等女学科の卒業生でもあり、在学中には宮沢のキャンプ地購入のためのバザーを開催し売り上げを



岡本幸江先生
(1965年高等部卒業
アルバムより)

寄付するなど「野尻っ子」のはしりともいえる方で、ご自分では「野尻狂教師」に名乗りをあげている。旧寺ヶ崎ハウス前にあった大きな合歡の木は、岡本先生が長野先生におねだりして植えていただいたものだ（「敬和会」No.58）という逸話もあるが、キャンプに卒業生リーダーを迎えることに尽力され、リーダー養成の訓練キャンプを提唱された

のは大きなご功績である（「野尻基金Newsletter」（6）「野尻湖回顧」寺澤東彦前小学部長執筆）。「野尻キャンプに何回も参加して実技も鍛え、キャンプも野尻も大好きになった者が若いリーダーとして後輩の世話をする。そこで英和のキャンプ教育が一応完成するのだ、と私は今でも思っている」（『野尻キャンプサイトの20年』「卒業生キャビンリーダーのこと」岡本先生執筆）との言葉からも、卒業後も生徒の成長を願う気持ちが伝わってくる。

最後に、現旧中高部教員から「永遠のキャンプマザー」と呼ばれる**長浜ツネ先生**（理科）を忘れてはならない。「キャンプマザー」とはキャンプリーダー組織における役割の一つで旧呼称を「ホステス」といい、キャンプという大家族における母親のように、おもに生活面で全体的な指導、調整をする責任者で、先の岡本先生も担当なさっていたことがある。長浜先生は1973年から繰り返し任命され、特に80年代は86年度に退職なさるまで毎年続けて務められていた。いつも明るく、ご自身もキャンプを楽しみながら、元気いっぱい皆を支えてくださった。細かいことに目くじらを立てず、キャンプ全体を大らかに見てくださった長浜先生は、生徒、卒業生のみならず、若い教員にとっても、心の支えとなる存在であった。

卒業後、裏方でキャンプを支える「管理」となった今西（旧姓 上野）清美氏（1972年高等部卒）は「野尻基金Newsletter」（5）の「先生方の思い出」



長浜ツネ先生
(1965年高等部卒業
アルバムより)

の中で、「常に首からタオルを掛け、ゴムぞうりで歩き回っては目が後ろにもあるかのごとく、次から次へと私たちに命令を下す長浜先生」と、生き生きと動き回る先生の姿を描いている。同じく管理や卒業生リーダーとして長く奉仕した磯西（旧姓 額田）弘子氏（1975年高等部卒）が語ったのは、「特に印象的なのは、先生がリーダーとアプ

レンティス〔卒業後1、2年目のリーダー見習い〕にハイズカ〔キャンプファイヤーで欠かせない掛け声〕の特訓をなされたことです。キャンプの始まるより前に学校の集会室へ集められ、皆が恥ずかし気に声を出すと『それじゃダメ！ もっとおなかの底から息を吐きだして！』と地から湧き出るような声でご自身がお手本を示されました。その後一同で『ハイズカ ズンバ ズンバ ズンバ』と踊り回る姿を思い出すと、今も可笑しくて仕方ありません』というエピソードである。先生がリーダーの育成にも体当たりでのぞまれた様子が垣間見える。磯西氏によると、閉寮（夏の終わりにキャンプサイトを閉める作業）にもいらして、コースロープやポートを磨きメインホールにしまう作業などを共に行い、旧 英和ハウス（管理棟）で一緒に寝泊まりして卒業生と教員の区別なく、ざっくばらんに話をしたのが楽し

かったという。これらの長浜先生のお働きは野尻の現地に限定されたものではなく、キャンプ研究委員会、キャンプ委員会など時々の名称でのキャンプ関連委員として長きにわたりキャンプの研究に勤しまれたことからくる、学校教育と野尻の野外教育を一つにとらえる大きな教育観に裏打ちされたものである。

ここに紹介しきれなかった「野尻を支えた」先生がたは他にも大勢いらっしゃる。キャンパー（キャンプの参加者）である生徒が、先生がたのご苦勞に気付き真に感謝するのは、卒業し、リーダー（指導者）となった時であるという。先達である先生がたに思いを寄せることが、野尻に足を踏み入れた一人一人が体験し受け継いできた野尻キャンプの神髓を、さらに広く繋ぎ引き継いでいく一助となれば幸いである。

三笠 知世（史料室）



左から長野先生、長野寿美夫人、岡本先生、長浜先生（1970年代後半か？）

史料室の活動より（2020年4月～2020年9月）

（☆は複数回）

2020年4月

- ☆「史料室だより」No.94編集
- ※4月7日 新型コロナウイルス感染拡大に対し、政府が特措法第32条第1項に基づく緊急事態宣言を发出
- ・緊急事態宣言後、どのように作業を進めるか「史料室だより」担当印刷会社、企画展示のための展示パネル作成担当のデザイナーと協議
- ※史料室では4月9日より在宅勤務開始、史料室閉室、展示コーナーも休業とする
- ☆大学のフレッシュマンセミナー「自校史」講義について、大学担当教員とメールで協議。元々は新入生向けの大教室で行う講義だったが、遠隔授業対応のパワーポイント教材を作成することに決定。オリエンテーションもない今年の大学新入生が理解できるように、昨年度から講義内容を大幅に変更
- ☆「史料室だより」No.94 校正作業をメールで続行
- ☆学校創設初期からの宣教師による資料「List of Graduates and New Pupils」の翻刻（数十ページにおよぶ筆記体資料で読解難解であったが、問い合わせも多い資料のためデータ化を試みる。各種参考文献とも照合）
- ☆学院各部ホームページのコロナ関連記事を中心に印刷、保存
- ☆同窓会誌「東光」57号（2020年秋刊行）原稿執筆のため資料調査、執筆
- ☆村岡花子文庫展示コーナー企画展「村岡花子からたどる東洋英和の英語教育」展示パネル校正をメールで続行

- ☆村岡花子記念講座関連業務（チラシ校正など）→しかし、2020年度の村岡花子記念講座は中止が決定される
- ☆「楓園」90号校正、各種案内の記載（コロナによる変更を反映）について、総務課や高等部長と連絡
- ☆「キリスト教学校教育」5月号掲載予定記事の校正
- ☆史料室資料目録チェック（2015年から採録を開始した所蔵資料のデータ約8700件より欠番、要修正箇所の抽出）

2020年5月

- ・「史料室だより」No.94発行。発送については、コロナ感染防止のため封入作業がままならないため、通常よりも遅れて発送することに決定。一部学内に配布
- ※政府が緊急事態宣言を変更（5月31日まで期間延長）
- ※史料室では引き続き極力在宅勤務を行い、各種業務を継続
- ・「キリスト教学校教育」5月号「キリスト教教育者物語」にミス・ハミルトンのカナダ日系人強制収容所での教育活動についての記事が掲載される（史料室執筆）
- ・学院年表作成中の史料室 酒井氏、谷川氏の在宅作業のための資料選定、スキニングなどを行う
- ・照会一高等部教頭より、戦時中の東洋英和の休校期間について→ 戦中、空襲も激しくなってくると臨時休校などにはなったが、基本的には長期休校はしなかった
- ・照会一大学教員より、宣教師が生徒の保証人になることはレアなケースか？→現在翻刻中の「List of Graduates...」によると、保証人の欄に「ミス・ブラックモア」などの記載あり。年に数件はある様子。年によっては一度に何人も生徒に対し同じ人物が保証人となっている例もあり

利用統計 (2020年4月～2020年9月)

		4月	5月	6月	7月	8月	9月
展示見学者数		2	—	—	—	—	—
展示見学者区分	学内関係者	2	—	—	—	—	—
	一般	0	—	—	—	—	—
新型コロナウイルス感染防止のため4月9日より展示コーナーは休業							
		4月	5月	6月	7月	8月	9月
資料閲覧者数 (累計)		—	—	3	2	3	3
閲覧者区分	本学学生・生徒	—	—			1	
	現教職員	—	—	1	1	1	2
	旧教職員	—	—				
	同窓生・学院関係者	—	—			1	
	同窓生 (研究者)	—	—				
	他校研究者・学生	—	—		1		1
	一般	—	—	2			
利用の目的	年史編集	—	—				1
	著述・論文作成	—	—				1
	伝記資料調査	—	—		1	1	
	記録類の調査・研究	—	—	1	1	2	1
	学院広報関係	—	—	2			
	その他	—	—				
資料の種類 (重複あり)	東洋英和関係	—	—	3	2	3	2
	カナダの教会関係	—	—				
	村岡花子関係	—	—				1
	周辺地域史	—	—	1	1		
	その他	—	—				
緊急事態宣言に従い、4月9日より5月31日まで史料室は閉室							
		4月	5月	6月	7月	8月	9月
月別レファレンス件数		—	8	12	15	6	13
質問者の区分	本学学生・生徒						
	現教職員	1	6		4	2	7
	旧教職員						
	同窓生・学院関係者		1	1	1	2	2
	同窓生 (研究者)			2	6		
	外部研究者・学生		1	2		1	
	外部研究機関			1		1	2
	一般	1		6	4		2
質問内容 (重複あり)	資料所蔵調査		2	4	9		5
	写真所蔵調査			3	2	1	2
	事項調査	2	6	8	9	3	10
	その他		2	1		3	

- ☆2020年度 第1回 史料室委員会準備
- ☆酒井氏、谷川氏、在宅勤務で学院年表作成作業を開始
 - ・管財課と本部・大学院棟地下2階倉庫物品の確認。
 - ヴォーリス校舎の礎石などを移動
- ・照会一和光大学辻直人教授より、100年前のキリスト教学校におけるスペイン風邪への対応について→東洋英和の資料には直接言及した資料は見当たらず。チラシなどは所蔵あり
- ・第1回 史料室委員会アジェンダを各委員に送信。今回は対面ではなく、メールで委員会の協議等を行う
- ☆ボランティアOG 梶田マリ氏と、『資料集7 村岡花子文庫洋書目録』(今年度刊行予定)について相談
- ・2020年度 第2回大学フレッシュマンセミナー講義動画「自校史」発信 (月曜クラス5/25 木曜クラス5/28)

2020年6月

- ※6月1日より史料室開室
- ・照会一史料室委員会委員長より、Webサイトの保存について→WARP 国立国会図書館インターネット資料収集保存事業にて東洋英和女学院大学のサイトは定期的に保存されている
- ☆村岡恵理著『アンのゆりかご』翻訳関連業務・翻訳進捗状況の確認など
- ☆「楓園」担当編集者と91号の特集について文献調査、協議
 - ・高等部長より、「新型コロナウイルス関連ファイル作成」について。100年前のスペイン風邪への対応がほとんど記録されていないことに鑑み、この歴史的な事態を記録する必要性を確認。中高部でもメールを記録し、マニュアルなどを保管

- ☆委託業者と資料目録修正について打合せ、修正作業
- ☆『野尻キャンプサイト50周年記念誌』(2021年夏 刊行予定) 編集会議、資料調査、執筆準備
- ・大学史資料協議会 2020年度総会メール開催、議案にメールで回答

☆村岡花子洋書目録 校正

- ・照会一渡辺里雨氏のローマ字筆跡について→初期のアルバムにミス・カートメルに宛てた自身のサインあり。ロンドンの徳富蘇峰宛の封筒の英字の筆跡と一致するかもしれない

2020年7月

- ・照会一日比谷文化館より、後藤新平夫人(後藤和子 旧姓:安場)は英和生か?→ご親族にも確認、『五十年史』には3箇所に記載あり。結婚後に東洋英和女学校に通っているが、卒業はしていない
- ・軽井沢のハミルトン&ハードコテージ清掃奉仕を今年は中止
- ・7月13日・15日 授業の一環として小学部4年生が展示コーナー、史料室見学(各10分間ずつ)。史料室スタッフで案内
- ・照会一京都府立盲学校より、ヘレンケラー来日時村岡花子が通訳をした時の音声の所蔵について→史料室には無し
- ・来室/調査一小学部教諭、初期の学校の位置や画像、小学部の戦前の画像などを調査
- ・山梨英和学院史料室へ山梨英和関連の資料を寄贈
- ・照会一卒業生(研究者)より、宣教師の別荘の土地所有、地上権についてご教示いただく

- ☆野尻関係しおり、キャンプソング在庫チェック、リスト修正
- ・地域誌「ザ・AZABU」No.51英語版校正
- ・中高部ICT支援室(旧社会科史料室)で廃棄予定のソファ、ガラス棚を史料室スタッフで確認→両方に「UCC BWM」のシールあり。これはおそらく「United Church of Canada Board of World Mission(カナダ合同教会 世界宣教部)」のもので、カナダからの寄付による寄贈品と考えられ、保管していくことに決定
- ・来室/調査—学外研究者。卒業生で東京家政学院創始者の大江スミに関して、ミス・カートメル、ミセス・ラーズがどのような教育を行っていたのかについて資料調査
- ・中高部「野尻っ子会」取材

2020年8月

- ☆「史料室だより」No.95編集作業(野尻特集 11月発行)
- ・地下2階書庫に調湿ユニット導入
- ・来室/調査—小学部教諭。小学部の戦前の画像検索など
- ・中高部から移管の野尻資料(段ボール6箱)を年代別に整理
- ・富山県の高志の国文学館より、「越中の先人コーナー」にて、英和で教え富山県初の私立幼稚園を設立したカナダ・メソジスト教会の宣教師亜武楽(アームストロング)・マーガレット氏の紹介映像を上映する旨のお知らせあり

2020年9月

- ☆「史料室だより」『野尻キャンプサイト50周年記念誌』に関する資料整理、調査を続行。原稿の校正も順次行う
- ・照会—元院長の光明照子先生の墓所について→鳥居坂教会、元教職員などに問い合わせたが所在は不明
- ・宣教師などの書簡整理
- ・資料目録採録用に野尻関係の資料を整備
- ・『第二版 現代カナダを知るための61章』(明石書店)掲載予定の東洋英和に関するコラムを史料室で執筆。学内、村岡家で校正
- ・来室/調査—中高部教諭。野尻キャンプのプログラムの歴史について調査、しおり等閲覧。ビッグカメラの導入された年については不明
- ・照会—山梨英和学院史料室より、野口ふみについて
- ・校正—大学学生手帳(2021年度版)歴史ページ
- ・第1回「カートメルセンター検討委員会」出席
- ・照会—関西学院大学出版会より、村岡花子の画像の撮影年代について
- ・25日 第2回 史料室委員会(対面とリモートを併用)
- ・来室/調査—他大学生。卒業論文執筆のため。戦時下の英語教育の資料など
- ・『野尻キャンプサイト50周年記念誌』の取材。元東京YMCA主事殖栗信夫氏にインタビュー

【おもな移管資料】

- ・幼稚園より、写真アルバム 2007年度~2009年度 10冊
- ・法人棟地下2階の倉庫から収蔵庫へ移動

- 刺繍された着物地らしきものを表装した屏風(創立35周年に野村みち子氏が寄贈したものと考えられる)
- 「1932年」ヴォーリズ校舎の礎石
- 短期大学と大学が併設されていた時期の学校の看板
- カナダから寄贈されたらしき絵画(3点)
- 東洋英和幼稚園・東洋英和女学校時代の看板ほか
- ・中高部より、2020年6月に使用をやめた中高部職員室の教員の出勤の木札と木札板(4セット)
- ・中高部より、倉庫から発見された過去の野尻キャンプ資料(各年度のファイル、写真アルバムほか)
- ・ガーネットハウス横浜より、「青楓寮 再会の部屋」(アルバム)

【おもな受贈資料】

- ・英文科一期生より、学院記念バッジ多種類、白いT.E.イニシャルのペンダント(ミス・マシューソンが亡くなった時に姪御様から贈られたもの)
- ・「昭和18年 第五十六回卒業証書授与式順序」(1943年3月19日)／「体連大会順序」(1943年10月28日)ほか
- ・野尻資料一式(ワークキャンプの記録/改築竣工感謝キャンプ写真/富岡先生からのお手紙(コピー)ほか)

【書籍・雑誌・論文】

- ・渡辺和子本学名誉教授より、『生と死をめぐる人間学』2012年度、2013年(大学の授業で使っていた教科書)／渡辺和子共著『世界の歴史1 人類の起原と古代オリエン』中央公論新社、2009年／『宗教史とは何か』上・下巻、リトン、2009年ほか
- ・関西学院大学 学院史編纂室より、『総合研究 カナダ』関西学院大学出版会、2020年
- ・佐藤千尋氏より、『ありがとう かみさま 一丸岡教会・緑幼稚園の100年—』日本基督教団丸岡教会、2020年
- ・山梨英和学院 史料室より、高崎宗司『朝鮮の土となった日本人 浅川巧の生涯』草風社、2015年／内藤多仲パンフレット/深沢美恵子「浅川伯教・巧兄弟とキリスト教—『浅川巧日記』より」／「村岡(安中)花子が教えた学校 山梨英和」
- ・明治学院歴史資料館より欠号分の資料集・年史類多数冊
- ・ハーツ&マインズより、『大田区 街歩き観光』(片山廣子の画像を貸出し)
- ・清水麻利子氏より、『佐佐木信綱研究』第11号、2019年(「村岡花子宛片山廣子書簡からの考察」所収)
- ・小谷明氏より、自著『デッサンで巡る 歴史別荘散歩 軽井沢の古い山荘』軽井沢新聞社、2020年
- ・原 光彦東京家政学院大学教授より、自著『スミばあばの言葉』星雲社、2020年(卒業生大江スミ関連本)

【おもな画像データ・資料提供】

- ・幼稚園へ、Web用画像のため初期の幼稚園画像など8点
- ・愛隣団へ、ミス・アレンの画像2点
- ・東京家政学院大学の原教授へ、大江スミの画像11点
- ・堀辰雄文学記念館へ、展示のため片山廣子画像2点

🌸 展示コーナー休業のお知らせ

「学院資料・村岡花子文庫展示コーナー」(六本木校地 本部・大学院棟1階)は、新型コロナウイルス感染症の感染予防・拡散防止のため、当面休業いたします。再開については学院ホームページ等でお知らせいたします。ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

🌸 既刊の「史料室だより」もお読みになれます

「史料室だより」は全号、学院ホームページで閲覧できます。「東洋英和 史料室だより」で検索、または下記のURLよりアクセスしてください。東洋英和の歴史が満載です。

URL: <https://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/publications/>

🌸 資料ご寄贈のお願い

史料室では、学院の歴史や学校生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。お手許にあつてご不要のものがございましたら、ご寄贈いただくと幸いです。また、卒業生および教員の方々の著作も収集しています。

【お問い合わせ先】 東洋英和女学院史料室 〒106-8507 東京都港区六本木5-14-40

Tel 03-3583-3166 (直通) Fax 03-3583-3329 E-mail archive@toyoeiwa.ac.jp